

— 連載 —

美術館のある風景 (第3回)

三菱一号館美術館の船出〈その二〉

三菱一号館美術館 館長 高橋 明也



今回は2010年4月に当館で開催された最初の企画展「マネとモダン・パリ」について書きたいと思います。実はこの展覧会の構想は、私が東京芸術大学の学生だった頃より、長い間温めていたものでした。印象派の登場を直接準備したマネは、真の意味で近代絵画の創始者であり、美術史上では、ルネサンス以降の古典絵画の巨匠たちや、ピカソ、マチスなど20世紀の大画家と並ぶ絶大な評価が与えられています。

しかし、不思議なことに我が国では、年下の弟分のモネやルノワール、同僚のドガ、さらにはファン・ゴッホ、ゴーガン、セザンヌなどと比べても、マネの知名度は格段に低いのです。その証拠に、印象派の画家たちを扱う作品展は、これまでも数限りなく全国津々浦々の美術館で開かれていたにもかかわらず、マネに関する展覧会を見かけることはほとんどありませんでした。

その理由は色々考えられますが、おそらく、明治期に日本の洋画家たちが最初にヨーロッパの油彩画に出会った時、すでに印象派絵画は全盛期に入り、他方、その道を切り開いた先行世代のマネは、既に過去の人となっていたのでしょう。いわば、タイミングの問題だったのかもしれませんが。

でも今でも、パリのオルセー美術館などで《草上の昼食》、《オランピア》、《バルコニー》、《すみれの花束をつけたベルト・モリゾ》などのマネの代表作に対面すると、革命的と呼ぶ他無いこの画家の挑発的な斬新さと同時に、何とも言えない上品なセンスの良さ、洒落た感覚に身震いを覚える

ときがあります。現在見ても不思議なほど新鮮で、いわば「永遠の現在」にも似た感覚を生むのがマネの芸術です。

実際にこの展覧会を訪れた30万人ほどの観客の中には、はじめてマネという画家を見出した方が数多くいらっしゃったようです。モネならば「睡蓮」、ドガの「踊り子」、ルノワールなら「裸婦」、ゴッホは「ひまわり」、ゴーガンの「タチチの女」、セザンヌの「りんご」といった画家とモチーフを結びつける分かり易い「アイコン」がマネには欠けていますが、その代わり、どの作品にも透徹する鮮やかな筆致と艶やかな黒の色彩があります。このように、ひどく重要であるのに見過ごされていたり、開催経費の収支バランス上（展覧会もそれは不可欠です）取り上げることがなかなか難しい画家や芸術運動を紹介することこそ、美術館という場の社会的責務だと信じている私にとって、それを可能にしてくれる三菱一号館美術館は本当に素晴らしい存在だと感じています。

美術館を出て丸の内側のビル街に三々五々と散って行く観客の人々の多くが、「いい展覧会だったね」、「マネって本当に魅力的な画家だね」などと話しながらニコニコと満ち足りた様子をしていたのが忘れられません。ただ、「今日のマネ展、良かったわよね〜、“睡蓮”が出てなかったのが残念だったけど・・・」という感想を聞いた時には思わず振り返ってしまいましたが。いずれにせよ、あれほど多くの美術愛好家の人々が街に溢れたのは、丸の内では初めての光景だったのでしょ